

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(B)（特設分野研究）

研究期間：2017～2020

課題番号：17KT0005

研究課題名（和文）日本におけるヘイトスピーチの心的基盤と法規形成の研究

研究課題名（英文）A Study on the Mental Foundation and Evolving Legal Norm regarding Hate Speech in Japan

研究代表者

西澤 由隆（Nishizawa, Yoshitaka）

同志社大学・法学部・教授

研究者番号：40218152

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、現行のいわゆるヘイトスピーチ対策法（正式名称：本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律）を超える新しい法規形成の可能性を視野に入れつつ、現代日本のヘイトスピーチに関する心的基盤を実証的に明らかにすることであった。より具体的には、いかなる条件のもとでこのような差別や言葉の暴力を一般の日本人が許容するのか、またその理由は何か、といったヘイトスピーチに関わる心的メカニズムについて、サーベイ実験の手法を用いつつ検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヘイトスピーチについてのこれまでの先行研究は、現実に観察される差別や言葉の暴力のみを考察の前提とする傾向が強かった。それに対して、本研究では、現代日本のヘイトスピーチに関する心的基盤を社会全体との関係性において明らかにすることを目指した。すなわち、ヘイトスピーチに焦点を当てるのみならず、一般の有権者が、ヘイトスピーチに対してどのように態度形成をするかについて検討することで、学術的に研究の射程を広めると同時に、この問題に関する「当事者意識」を、一般市民にも喚起することを目指した。

研究成果の概要（英文）：This project empirically investigated the mental foundations and evolving legal norms regarding hate speech in Japan. It aimed to provide scientific evidence in discussing the future development of Hate Speech Prevention Law, formally titled “Act on the Promotion of Efforts to Eliminate Unfair Discriminatory Speech and Behavior against Persons Originating from Outside Japan.” More specifically, the project addressed, using survey experiments, some concrete questions, such as, under what conditions the Japanese allow discriminatory actions and violent languages, and when they do so for what reasons.

研究分野：政治学

キーワード：ヘイトスピーチ サーベイ実験 差別 社会的期待迎合 同調 道徳基盤

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、現行のいわゆるヘイトスピーチ対策法（正式名称：本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律）を超える新しい法規形成の可能性を視野に入れつつ、現代日本のヘイトスピーチに関する心的基盤を実証的に明らかにすることであった。一般に、ヘイトスピーチとは、特定のマイノリティ、すなわち人種・民族・宗教・政治的信条・性的指向、そして、社会的身分などによって他の人々と区別される人々に対して、暴力や差別をあおったりその尊厳をおとしめたりする侮蔑的な表現を指す。ヘイトスピーチに対する政府の取り組みが十分でないとの国際的批判に長い間さらされてきた日本は、現行のヘイトスピーチ対策法を2016年に制定した。つまり、日本は、現在まさにヘイトスピーチに対する法規形成の途上にあるといえる。本研究は、このタイミングをとらえて、いかなる条件のもとでこのような差別や言葉の暴力を一般の日本人が許容するのか、またその理由は何か、といったヘイトスピーチに関わる心的メカニズムを、サーベイ実験の手法を用いつつ、解明しようとする試みであった。

また、本研究は、既存の研究動向を批判的に受け止めることを出発点とした。すなわち、これまでの先行研究は、現実に観察される差別や言葉の暴力のみを考察の前提とする傾向が強かった。それに対して、本研究では、現代日本のヘイトスピーチに関する心的基盤を社会全体との関係性において明らかにすることを目指した。いかなる社会もなんらかのマイノリティを内包する以上、差別や言葉の暴力を伴うヘイトスピーチは普遍的に存在する紛争の一形態であり、それは発話者だけでなく、それを許容するまわりの人々の態度や行動によって助長される。したがって、ヘイトスピーチに焦点を当てるのみならず、一般の有権者が、ヘイトスピーチに対してどのように態度形成をするかについての検討が不可欠であると考えた。

## 2. 研究の目的

上記のような背景のもと、具体的な「研究目的」として、次の5つの命題について検討することとした。

- 命題1：ヘイトスピーチに対する意見／態度が、一定程度、日本人に形成されようとしているのか。また、その場合、それはどのような様相を呈しているのか。
- 命題2：ヘイトスピーチ規制は、「表現の自由の保証」と理論的に緊張関係にあるが、日本人の意識の中にも、そのような緊張関係が具体的に認められるだろうか。
- 命題3：ヘイトスピーチ規制を容認する場合、そこには、「表現の自由の保障」に制約を設けることへの「正当化理由」が併せて認識されていることが理論的には想定される。そのような認識が、日本人には観察されるだろうか。
- 命題4：日本人のヘイトスピーチ規制に対する態度形成に、社会的圧力の影響は見られるだろうか。
- 命題5：日本人のヘイトスピーチに対する態度、あるいは、それを規制しようとすることへの賛否の背景に、道徳観や反差別規範が働いているだろうか。

## 3. 研究の方法

上記の命題を検討するために、当該研究期間中にWebサーベイ実験を3回実施した。いずれも、その実査は調査会社に委託した。ここでは、上記命題との関係で、われわれが採用した実験の構造（「ファクトリアル・デザイン」）について説明する。

### (1) 第1回調査 16 (4 × 4) ファクトリアル・デザイン

命題1を念頭に実施した第1回調査では、次のような2つの実験刺激で実験群を設定した。

まず、第1刺激であるが、それは、ヘイトスピーチのターゲット（対象集団）にかかるものである。具体的には、「在日コリアン」・「マイノリティ」・「障害者」の3つを想定した。それと、具体的なターゲットは伏せた統制群を加えて、計4つのグループ分けとなる。

そして、次に、ヘイトスピーチに当たる行為についての認識を測定するために、ヘイトスピーチに該当する行為の説明について4つのバリエーションを設けた（第2刺激）。まずは、「侮蔑的な言葉」を基本とし、それに「暴力を煽るような」の説明を追加する場合の2種類である。さらに、それらの2つに対して、「ヘイトスピーチ」との文言を付加するかどうかで、都合、4パターンを設定した。したがって、最終的には、全体で16 (4×4) のグループ分けを行った。

### (2) 第2回調査 10 (2 × 5) ファクトリアル・デザイン

命題2-4に答えるべく実施した第2回調査では、次のような2つの実験刺激で実験群を設定した。

まず、第1刺激は、第1調査と同様にヘイトスピーチのターゲットにかかるものである。ただ

し、第1調査とは異なり、「在日コリアン」・「障害者」の2つに対象を限定した。第1調査のデータ分析から、この2組の比較が、ターゲットの違いをもっとも顕著に表していることが判明したからである。

そして、実験刺激は、次の5要因からなっている。すなわち、ヘイトスピーチに該当する行為の説明として、「具体的なヘイト表現（『いなくなれ』・『死ね』・『殺せ』など）」を挿入した実験群を用意した。これは、第一調査からの発展型である。続いて、同調効果を測定する実験群として「規制に賛成：78%、規制に反対：22%」と「規制に賛成：54%」の2つの世論調査結果を提示した画面を用意した。最後に、社会的期待迎合圧力を検討する実験群として「差別意識をなくすことは望ましいとの説明文」を挿入したグループを用意した。それらに、「文言挿入ナシ（統制群）」を加えた、計5パターンである。最終的には、全体で10（2×5）のグループ分けを行った。

### (3) 第3回調査 44 ((2 × 7 × 2) + (2 × 4 × 2)) ファクトリアル・デザイン

命題 4-5 に応えるべく実施した第3回調査では、次のような4つの実験刺激で実験群を設定した（図1、参照）。

まず、第1刺激は、第2調査と同様にヘイトスピーチのターゲットについて「在日コリアン」・「障害者」の2つに対象を設定した。

そして、残りの3つの実験刺激は、道徳的基盤・反差別規範・多数派情報に対応している。まず、道徳的基盤について、道徳的基盤理論（Moral foundation theory, Haidt 2012）が提示する6つの具体的な道徳基盤のうち、ヘイトスピーチ規制にもっとも影響する考えられるものを組み合わせて「ケア・苦しみ」・「権威・秩序」・「公正・特権」の3次元を設定した。その上で、「政治的主張は、その受け手が支持する道徳基盤に従ってフレームされるときに、支持を促す効果を持つ」との仮説（Feinberg and Miller 2015）を検討するために、上記3次元に加えて、これらの道徳基盤と反差別規範を混ぜ合わせた文章を提示する3群を用意した。それらに、「表示なし（統制群）」を加えた、合計、7実験群となる。

3つ目の多数派情報は、第2回調査と同じ実験刺激を利用した。すなわち、「規制に賛成：78%、規制に反対：22%」との世論調査結果を提示した画面が挿入されているグループと、画面提示のないグループの2実験群である。

そこで、ここまでで、合計で28（2×7×2）のグループ分けとなる。

そのうえで、反差別規範への同調と、それを提示すること自体によって生じる同調について賛否の効果をも確認するために、そのことを問う質問（「規範同調質問」）が、調査には部分的に組み込まれている。具体的には、図1の「道徳的基盤」要因における（表示なし）から「公正・特権」までの4グループについては、「規範同調質問」の挿入の「ある・なし」でファクタリングしている。そして、そのような対象者が16（2 × 4 × 2）グループある。したがって、総実験群数は44である。

図1：第3調査のファクトリアル構造

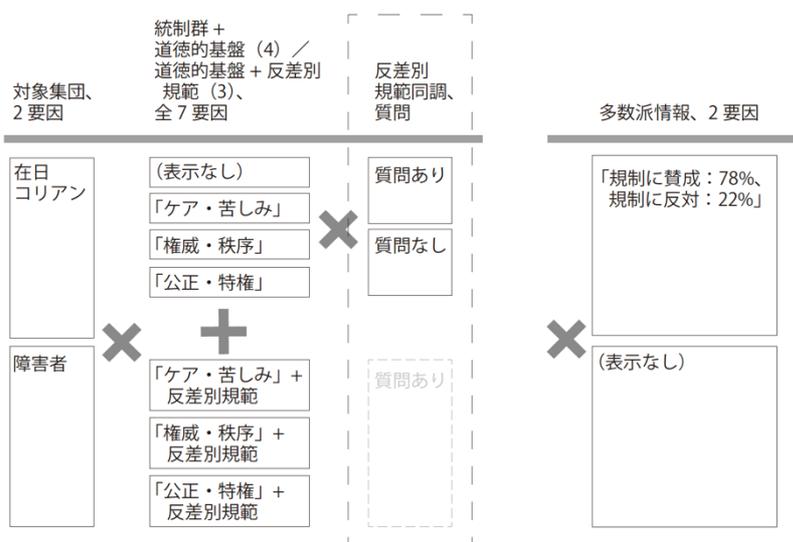
## 4. 研究成果

当該研究期間に、6本の研究論文を公表した（村上剛・西澤由隆 2021 は予定）。その「概要」を紹介することで、研究成果の報告とする。

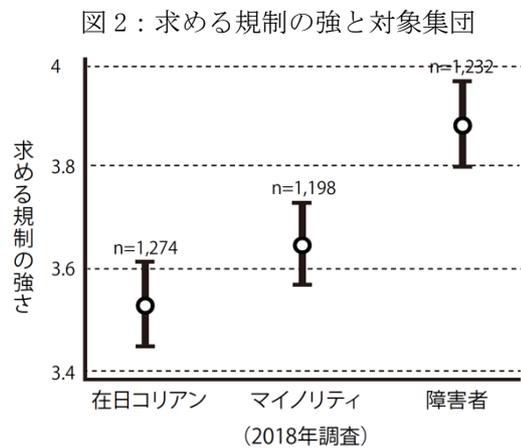
(1) 河野勝・西澤由隆 2019. 「ヘイトスピーチ規制への賛否はどう決まるか」『中央公論』2019年4月号、pp. 166-180。

この論考では、「ヘイトスピーチ対策法」の2016年における制定を受けて、その直後の一般有権者の、ヘイトスピーチ規制に対する態度を俯瞰的に捉えることを目的とした（命題1）。具体的には、1）ヘイトスピーチという概念が、どの程度、有権者の間で定着しているか、2）ヘイトスピーチ規制を望むのは誰か、3）ヘイトスピーチのターゲット（対象）によって、規制態度はどのように異なるか、そして、4）ヘイトスピーチ規制の正当化理由として「尊厳の保護」が有効であるかの4つの命題を、第1回調査を用いて検討した。

その結果、ヘイトスピーチの説明に用いる用語の違い、そして、そもそも「ヘイトスピーチ」との言葉が説明に使われるかどうかで、求める規制の強さが異なることが判明した。



つまり、抽象的な概念としての「ヘイトスピーチ」は、有権者のあいだで必ずしも安定的ではないことが示唆された。また、2変数間の相関においてであるが、年齢・性別・イデオロギー等でも、求める規制の強さが異なることが判明した。また、図2のとおり、ヘイトスピーチの対象として、「在日コリアン」・「障害者」・「マイノリティ」の3つを差し替えたとき、規制態度が変わることが判明した。(注) 最後に、「ヘイトスピーチが、尊厳を傷つける」との認識が、ヘイトスピーチにより強い規制を求め心理根拠となっている可能性も報告した。いずれの知見も、当該プロジェクトの研究遂行における「ベンチマーク」を設定することとなった。



(注) 対象を特定しない統制群を、実際には設定していたが、この分析からは除外。

(2) 村上剛 2019. “A Coded Language? When ‘Hate Speech’ is a Reflection of *Zainichi* Politics.” 2019年日本政治学会、2019年10月5日、成蹊大学。

ヘイトスピーチ規制の議論では、言論の自由に制約をかけることが妥当かどうかという論点を避けては通れない。その一方、日本におけるヘイトスピーチの規制は、その経緯から在日コリアンに対するヘイトスピーチが念頭に置かれてきた。このような文脈で、一般の有権者はヘイトスピーチ規制をどのような問題として捉えているのだろうか。この問いを第1回調査を用いて検討した(命題1・2)。

その結果、ヘイトスピーチ規制が、言論の自由の問題としてよりも在日コリアンに対する政治問題としてコード化されて(特定の政策議論が、別の事柄についての考慮に実質置き換わっていること)有権者に理解されていることが判明した。

また、ヘイトスピーチという単語を聞いた際に思い浮かべる内容を自由記述方式で尋ねた結果、回答者の多く(約4割)は、ヘイトスピーチに関連する言葉として「在日」もしくは東アジア諸国(韓国、北朝鮮など)を挙げた。また、自由回答をしなかった回答者に対し、ヘイトスピーチに関連すると思う単語を40単語から自由に複数選択してもらった質問では、最も選択者が多かった「差別」(3割)に次いで「在日コリアン」が2番目(約25%)に多く、その割合は「表現の自由」(1割弱)より高かった。

(3) 西澤由隆 2019. “A Study on the Mental Foundations and Evolving Legal Norms Regarding Hate Speech in Japan: Bandwagon Effect or Social Desirability Bias.” 2019年日本政治学会、2019年10月5日、成蹊大学。

本論文は、1)なぜ、ヘイトスピーチ規制への態度が、ヘイトスピーチのターゲット(対象)によって異なるのか(命題3)、そして、2)ヘイトスピーチ規制への態度が、「社会的圧力」の影響を受けているのか(命題4)の2点について、第2回調査データの分析から明らかにした。

そして、前者については、ヘイトスピーチ規制に対する「正当化理由」の効果が、ヘイトスピーチのターゲット(対象)によって異なることに起因している可能性を示した。例えば、「日本社会をよい方向に向かわせるか、あるいは悪い方向に向かわせるか」との問いで作業定義した正当化理由(「公共の福利」)は、在日コリアンがターゲットとなっている場合の方が、障害者の場合より大きな影響を及ぼすことが判明した。その他の正当化理由でも同様の傾向が見られることから、ターゲットによって規制態度が変わる背景には、一定の規則性があることを示した。

また、多数意見に対する同調効果(バンドワゴン効果)は、在日コリアンが対象の場合に、一定の効果が認められた。また、社会的期待迎合圧力は、いずれの場合も効果が確認できなかった。

(4) Murakami Go and Yoshitaka Nishizawa. 2020. “Following the Norms or Following the Crowds?” American Political Science Association, September 10, 2020, USA (online).

現代民主国家において、反差別の規範はいつ、どのように形成されるだろうか。とりわけ、多数派意見として現れた規範への迎合(バンドワゴン)と、平等・尊厳の原則についての考慮は、規範形成にどの程度の役割を果たすであろうか。これらの問いについて、本稿では検討した(命題4)。

社会心理学分野で主に発見・主張されてきた「記述的規範」と「指示的規範」の違いは、世論研究ではそれぞれバンドワゴン効果と社会的望ましき効果として個別に検討されてきたことを本稿はまず指摘した。そして、そのことを踏まえて、ヘイトスピーチ規制に対する両者の効果の比較検討を試みた。

具体的には、第2回調査を用いて、「多数派がヘイトスピーチの規制を支持している」という記述的規範のみを示した場合(バンドワゴン刺激)と、「ヘイトスピーチは差別を生み、良い社会のためには他者の違いへの尊重が求められる」とする指示的規範のみを示した場合(社会的望ましき刺激)に分け、政府によるヘイトスピーチ規制への賛否にそれぞれの刺激がどのように影

響するかを検証した。

分析からは、両刺激とも規制賛否への直接効果は見られなかった。しかも、多数派の意見に「流されやすい」と考える回答者や、社会的に望ましい意見を「気にする」回答者に対しても、理論的に予測される効果が認められなかった。さらなる検討が求められる。

(5) Kentaro Hirose, Kim Hae, and Masaru Kohno 2020. “An Experimental Study on Public Support for Hate Speech Regulations.” American Political Science Association, September 10, 2020, USA (online).

本稿は、ヘイトスピーチ規制の要諦として「尊厳 (dignity)」という概念を強調するジェレミー・ウォルドロンによって提起された規範的議論を、行動論的見地から確認することを目的とした (命題3)。

日本では、ヘイトスピーチに対処する法律が施行されてまだ日が浅く、したがってこの問題に関して一般市民がそれほど多くの議論を重ねてきたわけではない。そこで、第1回調査を用いて、この点の検討を行った。そして、その結果、市民の規制に対する支持に影響を与える要因として、ヘイトスピーチ被害にあった犠牲者が侮辱されたと感じたかどうかよりも、その犠牲者の尊厳が傷つけられたかどうかについての配慮の方がはるかに強く一貫していることが判明した。

さらに、本稿では、実験結果のメディエーション分析を通して、尊厳を重視する立論の因果メカニズムを解き明かすことを試みた。実は、ウォルドロン自身は、ヘイトスピーチが社会全体にもたらす帰結に関して公共的論理を前提にしており、この点について十分に議論を尽くしているとは言い難い。分析の結果、その因果パスを否定しないものの、より個人的な道徳的判断もヘイトスピーチ規制に対する態度を決定する上で重要であるとの知見を得た。

(6) 村上剛・西澤由隆「社会規範とヘイトスピーチ規制に対する態度」2021年日本政治学会研究大会 (2021年9月25日予定)。

ヘイトスピーチについての異なる情報は、一般有権者のヘイトスピーチに関する態度にどのように影響するだろうか。とりわけ、異なる規範情報や、異なる道徳的価値に訴えるメッセージが、反差別の規範やヘイトスピーチの規制政策、社会での解消努力の必要性についての人々の態度にどのように影響するかを本稿では検討した (命題6)。

道徳基盤理論によると、人々の価値観は5つの基盤 (危害・公正・忠誠・権威・神聖) に分類され、その重点の置かれ方は人により異なるという。本実験では、一方で、これらのうちヘイトスピーチに反対する主張に「危害」と「権威」基盤を用い、他方で、ヘイトスピーチを正当化する主張に「公正」を用いて文章を示した2実験群を用意した。その上で、「差別は許されない」とする指示的規範と、「社会の多数派はヘイトスピーチの規制を支持している」という記述的規範を表す文章を示したときの効果とを比較・検討した。

その結果、指示的規範や記述的規範の提示は、反差別規範、ヘイトスピーチ規制政策、解消努力の必要性の態度のいずれも効果が見られなかった。一方、ヘイトスピーチの危害に訴える文章はそれらへの賛成に、公正に訴える文章は反対に寄与する効果が認められた。しかしながら、それぞれの道徳基盤を重視する傾向は、指標としてのまとまりに欠けていたこともあり、上記3つの効果を強めるような一貫した傾向は今のところ確認できていない。

## 引用文献

- Feinberg, Matthew, and Robb Willer. 2015. “From Gulf to Bridge: When Do Moral Arguments Facilitate Political Influence?” *Personality and Social Psychology Bulletin* 41 (12): 1665-81.
- Haidt, Jonathan. 2012. *The Righteous Mind*. New York: Pantheon Books.
- Waldron, Jeremy. 2012. *The Harm in Hate Speech*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

|                                        |                       |
|----------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名<br>河野勝・西澤由隆                     | 4. 巻<br>-             |
| 2. 論文標題<br>ヘイトスピーチ規制への賛否はどう決まるのか       | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>中央公論、4月号                     | 6. 最初と最後の頁<br>166-180 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 2件/うち国際学会 12件）

|                                                                                                                                                    |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>西澤由隆                                                                                                                                    |
| 2. 発表標題<br>A Study on the Mental Foundations and Evolving Legal Norms Regarding Hate Speech in Japan: Bandwagon Effect or Social Desirability Bias |
| 3. 学会等名<br>日本政治学会                                                                                                                                  |
| 4. 発表年<br>2019年                                                                                                                                    |

|                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>村上剛                                                                            |
| 2. 発表標題<br>A Coded Language? When Hate Speech is a Reflection of Zainichi Korean Politics |
| 3. 学会等名<br>日本政治学会                                                                         |
| 4. 発表年<br>2019年                                                                           |

|                                                                                                                        |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>河野 勝・金 慧・広瀬 健太郎                                                                                             |
| 2. 発表標題<br>Indignity or Offense?: A Survey-Experimental Inquiry into Behavioral Foundations of Hate Speech Regulations |
| 3. 学会等名<br>日本政治学会                                                                                                      |
| 4. 発表年<br>2019年                                                                                                        |

|                                                                                |
|--------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>Kentaro Hirose, Kim Hae, and Masaru Kohno                           |
| 2. 発表標題<br>An Experimental Study on Public Support for Hate Speech Regulations |
| 3. 学会等名<br>American Political Science Association (国際学会)                       |
| 4. 発表年<br>2020年                                                                |

|                                                          |
|----------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>Murakami Go and Yoshitaka Nishizawa           |
| 2. 発表標題<br>Following the Norms or Following the Crowds?  |
| 3. 学会等名<br>American Political Science Association (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2020年                                          |

〔図書〕 計3件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                       | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                   | 備考 |
|-------|-------------------------------------------------|-----------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 河野 勝<br><br>(Kohno Masaru)<br><br>(70306489)    | 早稲田大学・政治経済学術院・教授<br><br><br><br>(32689) |    |
| 研究分担者 | 荒井 紀一郎<br><br>(Arai Kiichiro)<br><br>(80548157) | 中央大学・総合政策学部・准教授<br><br><br><br>(32641)  |    |
| 研究分担者 | 中條 美和<br><br>(Nakajyo Miwa)<br><br>(90707910)   | 津田塾大学・総合政策学部・准教授<br><br><br><br>(32642) |    |

6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                        | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                    | 備考 |
|-------|--------------------------------------------------|------------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 村上 剛<br><br>(Murakami Go)<br><br>(80737437)      | 立命館大学・法学部・准教授<br><br><br><br>(34315)     |    |
| 研究分担者 | 金 慧<br><br>(Kim Hae)<br><br>(60548311)           | 千葉大学・教育学部・准教授<br><br><br><br>(12501)     |    |
| 研究分担者 | 広瀬 健太郎<br><br>(Hirose Kentaro)<br><br>(90764738) | 新潟県立大学・国際地域学部・准教授<br><br><br><br>(23102) |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |